

インクルーシブ教育校内支援体制整備事業の

取組を踏まえた

インクルーシブな学校づくりの視点

Vol.2



令和8年 3月

神奈川県教育委員会インクルーシブ教育推進課



神奈川県では「インクルーシブ教育」を推進しているって聞いたけど、それってどういうこと？

神奈川県では「支援教育の理念のもと、共生社会の実現に向け、すべての子どもが、同じ場で共に学び共に育つことをめざす」という考え方でインクルーシブ教育を推進しているよ！



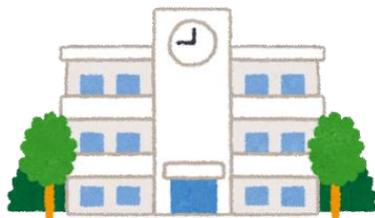
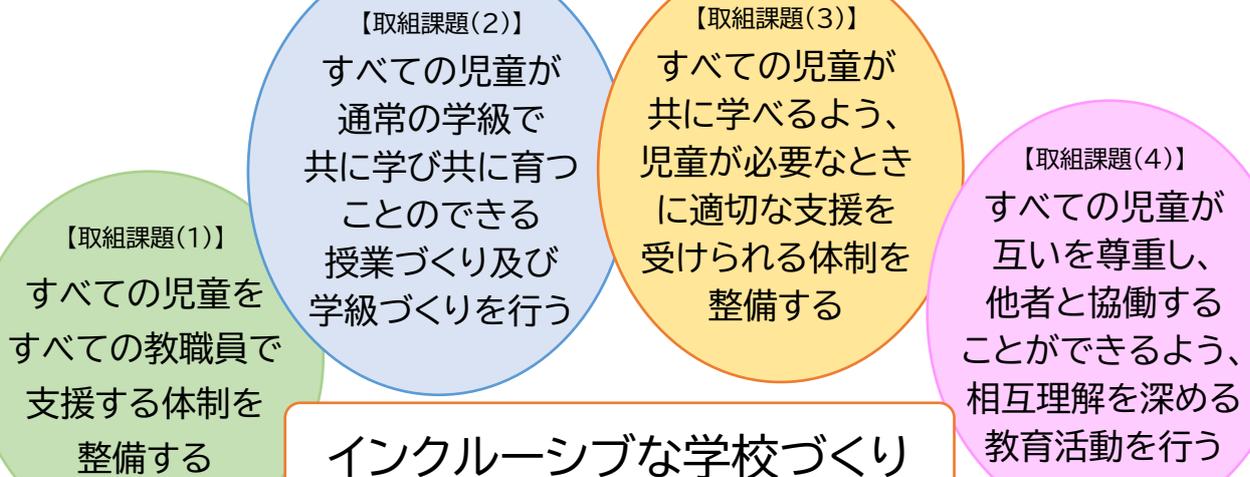
そうなんだ。それで、具体的にどんな取組をしているのかな？

小さい頃から共に学び共に育つことが大切であると考えて、小学校で「インクルーシブ教育校内支援体制整備事業」を実施しているよ！



それってどんな事業なの？

この事業では教育相談コーディネーターをキーパーソンとして、次の4点の取組課題をもとにインクルーシブな学校づくりを進めているよ！



<キーパーソン>
教育相談コーディネーター

目の前の子どもに合ったインクルーシブな学校づくりを進めていこう！



この冊子には、この事業をもとにしたインクルーシブな学校づくりの視点がまとめられているんだね！ 視点を大切にしながら各学校に合った取組を考えていけそうだね！



目次

○ 本事業の取組を踏まえたインクルーシブな学校づくりの視点

取組課題(1) すべての児童をすべての教職員で支援する体制を整備する。

1. すべての子どもをすべての教職員で支援する仕組みづくり……………4
2. すべての人を包摂し、対等な関係で取り組む学校としての意識づくり……………5

取組課題(2) すべての児童が通常の学級で共に学び共に育つことのできる授業づくり及び学級づくりを行う。

1. 学びの主体は子どもであるという意識で授業をつくる……………6
2. 関わる大人の姿勢が、共に学ぶ学級をつくる……………7
3. すべての教職員が様々な学級に関わる仕組みをつくる……………7

取組課題(3) すべての児童が共に学べるよう、児童が必要なときに適切な支援を受けられる体制を整備する。

1. 学級で、特定の子どもではなくすべての子どもを支援すること……………8
2. 通常の学級と様々なリソースルームを一体的に運営すること……………8
3. 子どもの状況に応じて、支援の体制や内容を柔軟に変更・調整できること……………9

取組課題(4) すべての児童が互いを尊重し、他者と協働することができるよう、相互理解を深める教育活動を行う。

1. 子ども同士が関係性を築きやすい環境をつくる……………10
2. だれもが参加できる活動や行事を子どもとつくる……………11

○ コーディネーター(以下、CO)をキーパーソンとしたインクルーシブな学校づくり……………12

○ インクルーシブ教育の推進に関わる情報……………13

インクルーシブ教育
校内支援体制整備事業って？

インクルーシブな学校づくりに向けて、神奈川県では令和元年度より
インクルーシブ教育校内支援体制整備事業をスタートしました。

政令市を除く県内30市町村(※1)が各1校の小学校を指定し、その指定校に非常勤講師を県が増員配置することでCOの授業時間を軽減し、COとしての業務にあたる時間を確保しています。(※2)
令和7年度末現在で、延べ50校の指定校および市町村教育委員会と共に取組を進めてきました。

※1 令和8年度より「フルインクルーシブ教育推進市町村(海老名市)」を除く県内29市町村

※2 後補充非常勤によって授業時間を軽減されているCOを、「事業指定教育相談CO」といいます。



インクルーシブ教育校内支援体制整備事業の取組を踏まえた インクルーシブな学校づくりの視点

取組課題（１）すべての児童をすべての教職員で支援する体制を整備する。

1. すべての子どもをすべての教職員で支援する仕組みづくり

所属する学級や学年にとらわれず、すべての子どもを「同じ学校の子ども」と捉え、すべての教職員で見ている学校全体の仕組みがあることが重要です。そのような仕組みがあることで、大人も子どもも一人で抱え込まず、相談しやすい雰囲気がつくられていくのではないのでしょうか。

取組例①



ねがい

教職員一人で課題を抱え込まず、すべての教職員で支援する仕組みをつくること。

やってみた！

「全職員が1コマ/週、各学級をサポートできる時間」を学校として設定。その時間はすべての学級を回ったり、必要な学級に入ったりして、支援する。

どうなった？

放課後に子どもの姿をもとに情報共有する教職員の姿が増えた。支援をみんなでしていこうとする教職員の意識が醸成されてきた。

取組例②



ねがい

学校運営に関わる、すべてのスタッフが必要な情報を共有したり、意見交換をしたりすることで、すべての教職員が学校運営に関わる仕組みをつくること。

やってみた！

介助員等との「支援スタッフ会議」を、授業時間内に月に1回程度、定期的に開催。参加した支援スタッフとCO、管理職で情報共有し、今後の対応について考えたり確認したりする時間としている。

どうなった？

すべての教職員ですべての子どもを支援するという学校全体の意識が高まった。



2. すべての人を包摂し、対等な関係で取り組む学校としての意識づくり

「子どもたちも教職員も多様であること」を前提とした意識の醸成が、インクルーシブな学校づくりには大切だと考えます。学校に関わるすべての人が対等に話し合ったり、トライ＆エラーができるような雰囲気大切にしたりすることで、すべての人を包摂する学校文化の土台がつくられていきます。

取組例

ねがい

対等に話し合える
教職員の関係づくり、
敬意のある関係づくり
を進めたい。

やってみた！

管理職が率先して教職員
一人ひとりが自分らしさを
発揮できるような場を設定
し、意見を出しやすい雰囲気
を作り、教職員同士のかか
わりを増やしている。

どうなった？

教職員の考え方が前
向きになってきている。
年齢や経験に関係
なく、お互いの意見を
尊重して協働できる
ようになってきた。



対話と協働 ～ある学校の学年会の場面で～

ある学校では、学年会が開始して5分間は、ざっくばらんに意見交換する時間を設けています。

：

A先生 「最近、忘れ物が多いのが気になりますね～」

B先生 「あ～そうですね。でもわたしは、忘れ物を“だらしない”で片づけちゃいけないと思うんですよね。」

C先生 「たしかに。忘れ物をしないための手立てを子どもに合わせて考えていくことが大切ですね。」

B先生 「同じ土台で学習にのぞめる手立てを考える必要がありますね。」

：

D先生 「今度の作文は『将来の夢』というテーマにしましょう!」

E先生 「いいですね。『ケーキ屋』とか『プロ野球選手』とか出てきますかね。」

D先生 「仕事でなくてもいいですね。『犬を飼う』とか『優しい人になること』でも。」

E先生 「そっか。夢=仕事だと思込んでました!」

：

この時間は、互いが感じたことを率直に話せる時間となっています。だれかと一緒に何かをつくる上で大切なことは、お互いにどんなことをイメージしているか、感じているか、考えているか、どうしたいかを対話することではないでしょうか。



取組課題（２）すべての児童が通常の学級で共に学び共に育つことのできる授業づくり及び学級づくりを行う。

1. 学びの主体は子どもであるという意識で授業をつくる

「何を教えるか」という教員主導の授業観から、「どう学ぶのか」という子ども主体の授業観への転換が必要であると考えます。研究授業などの特別な授業だけでなく、普段からそのような意識で授業をつくっていくことが大切です。

取組例①

ねがい

子どもが主体的に学べる授業を教職員全体で考えていくこと。

やってみた！

校内研究等を通して、教職員全体で「子どもが自分で選択できる授業づくり」を考えている。場所、メンバー、道具など、時々に応じて子ども自身が学びやすい方法を選べる。

どうなった？

子ども自身で学習を調整する姿が見られるようになってきた。教職員の授業づくりの視点が変容してきた。

取組例②

ねがい

子ども同士の協働的な活動を増やすこと。

やってみた！

教室の座席配置の工夫や共有スペースの活用など、子ども同士が学び合う環境づくりを校内で研究して実践した。

どうなった？

これまで当たり前だった環境を見直すことで、子ども同士の関係性が深まった。



【話し合いがしやすいようコの字型にした座席配置】



【協働的に学びやすい共有テーブル】



2. 関わる大人の姿勢が、共に学ぶ学級をつくる

すべての子どもが共に学ぶためには、一人ひとりが尊重され、学級を誰にとっても安心できる環境にしていくことが大切です。学級における重要な環境の一つが、関わる大人の姿勢です。教職員がすべての子どもの意見を等しく大切に、子どもと共に学級をつくり上げていくという姿勢が重要であると考えます。

取組例

ねがい



子どもたち一人ひとりを尊重し、子どもたちにとって安心して過ごせる学級をつくる。

やってみた！

子どもの声に耳を傾けることや対話を大切にする理念を教職員で確認し、学級において子どもたちの対等な関係づくりを支援している。校内研究を通して学校全体で取り組んでいる。

どうなった？

子どもも教職員も一人ひとりを尊重しようとする意識が醸成されてきた。子どもは安心して意見を言う姿が多くみられるようになった。



3. すべての教職員が様々な学級に関わる仕組みをつくる

すべての子どもが学級で共に学ぶことのできる授業づくりは、すべての教職員で取り組むことが重要です。そのためには、一人の教員が複数の学級・学年の授業や通常の学級と特別支援学級の両方の授業を担当することや、日常的に情報交換する時間を確保することなどの工夫が大切です。

取組例

ねがい

すべての子どもが学級で学ぶことができるような授業づくりをすべての教職員で考える。

やってみた！

低学年から高学年まで、通常級・支援級の担任が交換授業を年間通して実施。下校時刻や掃除の回数を変更して情報共有の時間を確保している。

どうなった？

通常級・支援級の相互の学びを意識した授業づくりを行う教職員が増加してきた。



取組課題(3) すべての児童が共に学べるよう、児童が必要なときに適切な支援を受けられる体制を整備する。

1. 学級で、特定の子どもではなくすべての子どもを支援すること

子どもが必要なときに適切な支援を学級で受けられる体制を整備することが重要です。学級で個に応じた支援をする際には、特定の子どもではなくすべての子どもを支援することを前提にし、子ども同士がひとりの学習者として対等な関係で学び合うことができる環境をつくることが重要です。

取組例

ねがい

学級において、共に学ぶための適切な支援体制を整備すること。

やってみた!

担任以外の教員や支援員が日常的に学級に出入りし、すべての子どもを対象に支援を実施する。

どうなった?

学級にいる子どもや大人(教員や支援員)に合わせて柔軟に支援ができるようになった。



2. 通常の学級と様々なリソースルーム(※)を一体的に運営すること

子どもの学びを支えるため、様々なリソースルームが設置されてきていますが、学びの場の確保だけでは分離を生む場合があります。場の確保だけではなく、大人も子どもも学級を基盤とする意識を持つことや、すべての教職員で情報共有をする仕組みを整え、すべての学びの場を一体的に運営することが大切であると考えます。

取組例

ねがい

リソースルームを利用する子どもについて、学級を基盤に、一体的に支援にしていく必要がある。



やってみた!

学級とリソースルーム双方の活動や環境設定を生かしつつ運営している。子どものリソースルームでの活動を担任やまわりのCO、担当で共有したり、担任だけが子ども本人に関わるのではなくすべての教職員で言葉かけをしたりする等、学校で一体感をもって取り組んでいる。

どうなった?

学級を基盤としながら、柔軟に対応する場が様々なことで、学校で子どもたちが安心して過ごせるようになった。



※「リソースルーム」は、各指定校において児童を支援するために学級以外の場所を総称している。名称は指定校によってさまざまである。

3. 子どもの状況に応じて、支援の体制や内容を柔軟に変更・調整できること

支援方法が子どもに合っているかを確認し、子どもの状況の変化によって、支援方法を柔軟に変えることのできる仕組みが大切です。その際、どこでどのように支援してほしいかなど、子どもの声を聞いて、支援の体制や内容を柔軟に変更したり調整したりすることが可能であることを、すべての教職員が意識して取り組むことが重要だと考えます。

取組例①



ねがい

本人の声を聞きながら支援を考えていくことで、子どもの状況に応じた柔軟な支援体制を構築していきたい。

やってみた！

大人だけで決定した方針で進めるのではなく、子ども本人と共にケース会議を実施。常に子どもの思いや考えを聞きながら支援を決めていくこととした。

どうなった？

子どもと共に考えることで子どもが自ら学びに参加し、様々なことに挑戦できる学校になった。

取組例②



やってみた！

リソースルームについて、運用も児童の状況に合わせて変化。チャレンジできる学習の場や一息ついてから教室へ向かう場等、子どもとじっくり相談しながら、柔軟に運用している。

どうなった？

教職員は、教室についても安心できる場所にしていくことを、話し合うようになった。

～地域とともに広がる学びの場～

「地域の学校は地域で支える」という考えのもと、地域サポーターが授業時間内に、担任とともに学習を支える学校があります。地域の方や卒業生の保護者が運営するサポーターズルームを拠点に、校内巡回や学習支援、校外学習の付き添いなどを行い、教職員と子ども双方を支えています。

また、保護者によるサポーターチームが子どもたちの「やってみたい」を形にする学校もあります。教職員・子ども・地域が計画を重ねた『ツリーハウスづくり』の夢は、クラウドファンディングや地域の方々の協力で実現しました。今では学校に通う子どもたちの居場所となっただけでなく、地域の方々の憩いの場、卒業生の戻ってくる場等、地域のシンボルになっています。



取組課題（４）すべての児童が互いを尊重し、他者と協働することができるよう、相互理解を深める教育活動を行う。



1. 子ども同士が関係性を築きやすい環境をつくる

子どもたちの関係性は、日常的に共に過ごすことで自然と築かれていくものです。教職員が普段から子どもたちの対等な関係性を支援するとともに、教室配置の工夫や、どの教室もすべての子どもに開かれた場にしていく等の環境面の整備に取り組むことも、相互理解が深まることにつながると考えます。

取組例



ねがい

日常的に子どもたちが共に過ごせるようにすることで、自然な関係性を育む。

やってみた！

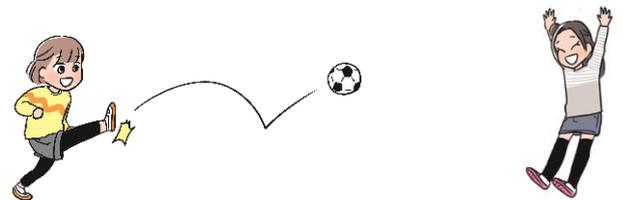
支援級を校舎の中心に設置。
休み時間や登下校時に様々な子どもが支援級に立ち寄れるようにした。だれにとっても過ごしやすい場所になるよう、楽しい雰囲気づくりや言葉かけ等に気を配った。

どうなった？

休み時間や登下校時に支援級で楽しく過ごしたり、互いに誘い合って授業に向かったりする姿が多く見られるようになった。



【共に学びやすい机】

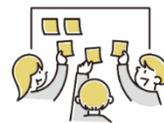


【学年エリアに設けられた共有スペース】



【ベンチのある共有スペース】

2. だれもが参加できる活動や行事を子どもとつくる



学校で行われている様々な活動や行事について、「だれもが参加できること」を前提に、前例にとらわれず柔軟に変更・調整していくことが重要です。見直しに際しては、教職員だけで議論するのではなく、子どもたち同士で主体的に考える機会があることによって、相互理解が深まると考えます。

取組例

ねがい

行事や活動の中で、子どもたちにとって参加しづらくなっていたことを改めて見直し、だれもが参加できるようにしたい。

やってみた！

「だれもが参加できる運動会」という視点で、子どもたち同士で主体的に考える機会を設定した。大人も子どもも一緒に種目の内容を見直し、全学年の子どもたちが楽しめるようなルールに変更・調整した。

どうなった？

子どもたちが安心して学校行事に参加できるようになった。また、大人も子どもも一緒に考えることで、全員参加を前提に変更・調整をしていく意識が学校全体で醸成された。



【子どもと相談しながら活動をする様子】



【子どもたちが考えた行事の達成記録】



COをキーパーソンとしたインクルーシブな学校づくり

火曜日3時間目
子どもの情報を
関係機関と相談
今後の支援に
ついて話し合う

水曜日2時間目
管理職と共に、
校内支援体制
について相談

月初め
子どもたちが
安心して学べる
環境づくりを
ケース会議で
検討

月曜日1時間目
子どもの登校に
合わせて来校し
合わせて来校し
た保護者と面談

木曜日4時間目
職員室で初任者
の先生と共に、教
室環境を相談

毎日朝学活
子どもたちの
様子を把握する
ため、学校全体
を巡回

金曜日1時間目
教室に入りにくい
子と相談
⇒放課後に担任と
座席配置を検討

COとしてみんなから話しかけられ
やすい雰囲気を感じています。
みんなをつなぐ存在になろうと思
っています。



授業を充実することで、すべての子ども
たちが一人ひとり大切にされる取組につ
ながっていくと思います。学校全体で授
業づくりや環境づくりを考えていきたい
です。



情報共有の時間を十分とるのがなかなか難しく
感じます。ICTやノートなどを活用して、みんな
で一緒に考えていこうと思っています。



インクルーシブ教育の推進に関わる情報

リーフレット

この冊子で使われているイラストの「インクルーシブ教育に関わるマンガ」のリーフレットです。神奈川県教育委員会インクルーシブ教育推進課のホームページからご覧いただけます。

「インクルーシブってなんだろう」



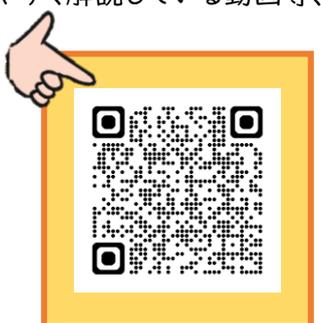
「インクルーシブってなんだろう ~アンコン編~」



動画

インクルーシブ教育の推進に関わる動画

VTuber が「神奈川県のインクルーシブ教育」について、分かりやすく解説している動画等、多数。



イベントなどの情報

インクルーシブ教育推進課のホームページに、最新の情報を掲載しています。



インクルーシブ教育推進課

検索





インクルーシブ教育推進課HP





神奈川県教育委員会教育局

インクルーシブ教育推進課

〒231-8588 横浜市中区日本大通1

電話 (045) 285-1022(直通)